
WORKING!! -個性的なファミレス-

神無月愛衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WORKING!! -個性的なファミレス-

【Zコード】

Z7932Y

【作者名】

神無月愛衣

【あらすじ】

北海道某所にあるファミリーレストラン『ワグナリア』。

ここには、『ミニコン』の男子高校生や、『男性恐怖症』の女子高校生、小さい頃から帯刀している二十歳の美人フリーターなど、個性的な店員ばかりが働いていて！？

小説を書く前に

これは、私、神無月愛衣が好きなアニメ『WORKING!!』の小説です。

この小説の登場人物は、以下の通りです。

（登場人物）

- ・小鳥遊宗太
- ・伊波まひる
- ・種島ぽぶら
- ・佐藤潤
- ・轟八千代
- ・山田葵
- ・相馬博臣
- ・白藤杏子
- ・松本麻耶
- ・音尾兵吾
- ・音尾春菜
- ・山田桐男
- ・小鳥遊一枝
- ・小鳥遊泉
- ・小鳥遊梢
- ・小鳥遊なづな

毎回、キャラの視点を変えていこうと思っています。

基本は、自分でストーリーを考えますが、『こんな話を書いて欲しい！』というのがあれば、書こうと思

つています（その際は、メッセージでお願いします）。
更新を頑張りますので、是非読んでください

小説を書く前に（後書き）

これはあくまでも前書きみたいなものなので、見なくてもいいし、見てもいいです。

私的には、この小説を書いていることを知つて貰えればいいので。今から更新していくますが、アドバイスや、感想を是非書いて欲しいです。

これからよろしくお願いします。

一品目 小鳥遊宗太の極み（前書き）

と書かれていた『第一品』です。

どうぞお楽しみください。

一品目 小鳥遊宗太の極み

北海道某所にあるファミリーレストラン『ワグナリア』。
おれ 小鳥遊宗太は、このファミレスで毎日アルバイトで働いている。

家では、鬱陶しい姉たちの面倒を見て、このファミレスでは、『男性恐怖症』のある年増の相手をして。
毎日忙しいばかりである。

「ハア……」

考えるだけで憂鬱だ。

どこへ行つても、年増の相手をしなければならない。
何處かに『樂園』はないだろつか……。

ちつちやくて、可愛いものばかりの『樂園』が……。

そんなことを考えながら歩いていると、おれはいつの間にか、『ワグナリア』に到着していた。

「まあ、ここに来れば、先輩もいるしな……」

そう思いながら、おれは従業員用のドアを開けた。

「あ、かたなしくん！ 今来たの？」

と、明るく声を掛けたのは

「あ！ 先輩！ おはようござりまー！」

「おはよう、かたなしくん」

学校とファミレスの先輩の

種島ぽっぴりである。

先輩は、ちつちやくて。

先輩は、可愛くて。

先輩は、おれの『妹』になつてほしこへりこのちつちやくて可愛い先輩なのである。

「もう！ かたなしくん！ 『ちつちやくて』って所を強調しないで

よー。」

先輩は、いつものように怒っていた。

「あー！ 怒ってる先輩も可愛いなー」

「逆効果！？」

どうやら先輩は、おれが先輩の『可愛さ』を強調したことがショックだつたらしい。

身長が低いのは先輩の悩みだもんな……。

でも、そんな悩んでいる先輩も可愛いのだが。

「先輩はいつもちつちつちやくてちつちやくて可愛いもんなー」

おれはいつものように、先輩の頭を撫でた。

すると先輩は、

「もー！ しようがないなー、かたなしくんは」

と、お姉さんぶつっていた。

正直、可愛い。

あー。世の中、先輩みたいなちつちやくて可愛い人ばかりだったらしいのになー……。

「じゃあ、おれ着替えてきますね

「はーい」

そう言つておれは学校の制服から従業員用の制服に着替えるため、更衣室へと向かった。

「おー、小鳥遊。來てたのか」
着替えて働こうとしたおれに、大人の女性の声が掛かつた。

「店長……」

おれは店長がパフェを食べているのを見て、溜息をついた。
「またチーフに作つてもらつたんですか？」
「ああ。腹が減つてたからな」
「佐藤さんに怒られますよ？」
「構わん。食べればそれでいい

やつ言つて、右手に握つてこるスプーンでパフュームを一口取り、食べる。

「……怒られても知りませんからね……」

「年増のことなんて、どうでもいい。」

それより、仕事だ、仕事。

「……では、ご注文は以上でよろしこうじょうか?」
「そう言つておれは、テーブルを後にする。
今日は天氣が悪いからか、客が少ない。
どうやら、今日の天氣予報は当たつたみたいだ。
「雨……降らなかつたらいいね……」
「そうだね……。雲が多くなつてきたから、今日は早めに食べよつ
か……」

「そうだね。やつしよつか」

なんて、お客さんの声も聞こえる。

「雨……降るんだらうづか……」

「そうだね……。私傘持つてきていなかり、もし降つたらどうしよう
う……」

「え? 先輩、天氣予報見なかつたんですか?」

「うん。忘れちゃつたから……」

少し落ち込みながら、先輩は言つた。
可愛い……。

「……かたなしきん、私のこと、また可愛いくつて思つたでしょ?」

「え?」

いきなり先輩が話を切り出しこきたので、おれは思わず驚いてし
まつた。

「ハア……。かたなしきんにせ、私が何言つてもだめだね……」

「…………」

「何を言つての駄目なことは、背があつひやこのと、佐藤さんとい

じめられた」との次へ「この悩みだよ~」

「先輩……」

その悩みの順だと、おれの「ことは」は「一番困った」とだよな。
けつこつな悩みではないか?「これは。

「ねえ、かなしきん。かなしきんには、悩みとかないの?」

「悩み……か……」

う~ん……よく考えてみれば、悩みなんてこっぽいあるね。

例えば……。

……何か考えるだけでいらっしゃってきた。

「……年増……!」

「え? 何? かなしきん」

「一枝姉さんや、泉姉さんや、梢姉さんとか……。とにかく!
年増の相手をしないといけないのが悩みですね!」

「か……かなしきん! 落ち着いて……!」

いつの間にかおれは本気になっていた。それを見ていられなくな
ったのか、先輩は必死で止めていた。

「だ……大丈夫?」

「ふう……。落ち着きました、先輩。もう大丈夫です」

「そつか……よかつた~」

安心したのか、先輩はにっこりと微笑んでいた。

「かなしきんも結構大変だね」

「そうですね~。ただでさえ、姉さん達の面倒を見てるつづいて

に……」

「ん?」

「伊波さんの『世話係』もありますからね~。前、店長がおれを労
つて『世話係』を解任したとき、あのままにしていけばよかつたん
ですかね~」

と、このときおれは、特に悪気はなく、『冗談のつもりだった。
それなのに。

『冗談では済まなくなってしまった。

「か……かたなしくん……」

「ん? 何ですか、先輩」

よく見ると、先輩は、『今言つちゃいけなかつた!』みたいな顔をしていた。

「どうしたんですか? せんぱー」

その時だつた。

ガッシャーン!

と、皿が割れた音がした。

「ん? この音は……。また山田か。全く、山田も困るな~」

と、そこで思い出す。

そう言えば、今日は山田シフト入つてなかつたな。

じゃあ、一体誰が……。

その人物は目の前にいた。

肩を震わせて、泣いていたのは

「い……伊波さん……?」

そうだつた。

伊波さんも、今シフト中だつた。

つてことは、今ここにいて皿を割つたつてことは、今の、先

輩との会話を、聞いていた?

「…………」

伊波さんは、少しだけど泣いていた。

「ち……違つのー、伊波ちゃん。これは……その……かたなしくんの冗談で……」

先輩は、必死に、この誤解を解こうとしていた。

「そうですよ! 伊波さん。おれは、最後まできちんと、いー」

「…………犬の面倒を見る…………でしょ?」

伊波さんは、おれの言葉を遮るよつて言つた。

いや。

実際、遮つたんだよつ。

「わ……私、小鳥遊くんが……面倒を……最後まで見てくれるつて言つてくれて」と……嬉しかつたのに……」

「伊波さん……」

「だ……だから、男嫌いを直すこと……。小鳥遊くんを、一秒でも早く殴らざに済むようにつて……。頑張りつて……。そつ思つたのに……」

伊波さんの言葉は、途切れ途切れで上手く言えてなかつたが。普通に言つよりも、遙かに重かつた。

「私は……結局、小鳥遊くんにとつて……『犬』でしか……そんな存在でしか……なかつたんだよね？」

「……」

「私のこと……犬としか、見てなつかつたんじょ……！」

最後に、口を開いて、何かを言つて、その場を離れていつた。

「い……伊波ちゃん！　かたなしくん！　伊波ちゃんを追いかけなきやー！」

先輩は必死だ。

普通なら、伊波さんを追いかけるだよつ。

けど、今のおれにはそんな簡単なことができなかつた。

伊波さんが最後に言つた言葉。

声が小さくて聞き取れなかつたが、口の動きだけで何を言つているかおれには分かつた。

最低だよ

その言葉が、おれに重くのし掛かっていた。

一品田 小鳥遊宗太の悩み（後書き）

どうでしたか？『第一話』『一品田 小鳥遊宗太の悩み』は。いきなりこんな話から入るのは、正直どうかな～って思いましたけど。

今放送中の第一期『WORKING---』は、こんな感じの、人間関係が、ストーリーを引き立たせているので、それに乗っかろうと思いました。

……でも、難しいですね、宗太の語りって。

『可愛い』とか、『ちっちゃい』とか、連呼しますもん。そんなことしてたら、一話で終わらせるつもりだったのが、一話と一話に分けることになってしましました。

ま、いつかな？

つてことで、『一品田 小鳥遊宗太の悩み』でした。是非続きを見てください。

一 品目 伊波まひるの想い（前書き）

『一品目 伊波まひるの想い』です。

タイトルからも分かるように、今回の語りはまひるです。

個人的には、結構まひるも好きなので、頑張ります！

それでは、召し上がり

一品目 伊波まひるの想い

「ハア……ハア……ハア……」

疲れた……。

ファミレス『ワグナリア』から結構走ってきたみたい……。

でも、仕方がない。

小鳥遊くんにあんなことを言われたんだから。
気が動転しちゃったんだもん……。

「それにしても……酷かったな、小鳥遊くん……」

多分、私に気付いていなかつたんだと思つ。

だから種島さんもあんな風に小鳥遊くんのフオローをしていたんだろう。

それでも、あれは酷かつた。

前、店長がおれを労つて『世話係』を解任したとき、あのままにしていればよかつたんですかね~。

確かに小鳥遊くんはそう言つた。

「もつ……、小鳥遊くん……のー 馬鹿……ー」

小鳥遊くんが殴られずに済むよつこ。

小鳥遊くんが痛い思いをしないで済むよつこ。

小鳥遊くんが幸せになれるよつこ。

全部 小鳥遊くんのためだったのに……。

貴方のために、男嫌いを直面せつてたの……！

頑張つてたのに……！

それなのに……！

小鳥遊くんは、ちつとも気付いてくれない。
鈍感すぎるよ……。

ぱつん。

と雨が降り始めた。

「そう言えれば……、天気予報……雨だつたつけ……
どうしよう。私今、傘持つてないや……。

「今日は最悪だな……」

そんな風に、感情に浸つている間にも、胸はどんどん強くなつていぐ。

やがて、小雨から大雨になつた。

そんな雨に紛れながら私は、

「うつ…………うつ…………うつ…………

涙を流した。

私が泣いていることなんて。

きつと雨が應してくれる……よね……？

しばらぐの間泣いていたけど、今私は泣きやんだ。
今はただただ、立ち竦んでいた。
雨に私は濡れ続ける。

「…………」

無言の時間が、絶えることなく流れていぐ。
そのまま、永遠とこの時間が続くんじゃないのかつて思つてた。
さつときまでは。

「あらあら。ここにいたの？ 伊波ひかる

「え……？」

私の頭の上に、すっと傘を差す。

「探したんだから」

その人物は

「や……八千代さん？」

ファミレス『ワグナリア』のホールチーフの、轟八千代だった。

「な……何でここにいるって分かつたんですか？」

「さあ……。チーフの感、かしら？」

「そうですか……」

今、チーフなのは、そんなに関係ないんじや……？

「さあ、帰りましょ、『ワグナリア』に」

「え……」

「みんな、伊波ちゃんのこと、心配してたのよ？」

「…………そう……かもしれないけど…………」

「けど？」

私は、言葉を探すのが、大変に思えた。

だつて、今の気持ちを、どう言葉にしたらいいのか、分からなかつたから。

「か……小鳥遊くんは……私のこと……ビリビリでもいいみたいだし……」

「…………」

「せ……『世話係』も……、嫌……みたいだつたから……その……」

「氣まずい？ 小鳥遊くんと」

八千代さんの言葉は、真つ直ぐで、遠慮なんてなかつたけど。

今、一番優しい言葉のような気がした。

「…………はい」

私は、八千代さんの言葉に、素直に返事をした。

「そつか……」

八千代さんは、『やつぱりね』と言いたそうな顔だった。

当たり前だ。

私が言えることは、それだけだから。

八千代さんもそれを分かつて

「でもね、伊波ちゃん」

と、驚くことに、八千代さんは言葉を続けた。

「貴女は小鳥遊くんに会うのが気まずいかもしれないけど……」

「…………？」

「小鳥遊くんは、伊波ちゃんに、謝りたいと、そう思つていいのよ

「え？」

それは、私にとつて意外だつた。

あの、十二歳以上の人を人間と認めず、『年増』と呼ぶ彼が。

一歳年上の私に？ 謝りたい？

「ほ……本當ですか……？」 八千代さん……

「ええ」

八千代さんは、はつきりと断言した。

私にとつてそれは、一番嬉しい返事だつた。

「だから、帰りましょ？ 『ワグナリア』へ

微笑んでそう言う八千代さんは。

輝いていた。

私はそんな八千代さんに、感謝の気持ちを抱きながら、

「…………はい」

確かに、そう言った。

「…………あ！ 伊波ちゃん！」

お店に入つて途端、種島さんが、勢いよく私に向かつて走つてき
た。

「た……種島さん……」

「もう！ 伊波ちゃんの馬鹿！ 心配したんだよー。」

「うん……。ごめんね、種島さん」

私の所為で、種島さんに心配を掛けちゃったんだな……。

本当にごめんね、種島さん。

「い……伊波さん……」

と、不意に声が掛かった。

「た……小鳥遊くん……」

いつからいたんだね。

私の目の前には。

小鳥遊くんがいた。

「あの……ですね、伊波さん……その……」

小鳥遊くんは、凄く戸惑っていた。

そつか。『悪かった』って、思ってくれてるんだ。

八千代さんの言つた通りだつたんだ。

私の心が、晴れた気がした。

「もういいよ、小鳥遊くん」

「え……」

「冗談だったんでしょ？ あれは……」

「…………」

「私も悪かったと思うよ。冷静じゃなかつたし……」

「伊波さん……」

「だから……、許すよ」

「はい……」

小鳥遊くんは、安堵の表情を浮かべていた。

その後、彼はこう続けた。

「おれの方こそ……。すみません」

「……いいよ」

私は、小鳥遊くんが謝ってくれた、それだけで嬉しかった。

それはともかく……。

「あ……あの……。それでね……？ 小鳥遊くん……」

「え？ 何ですか？」

「なんて言つか……その……」

さつきから私はある『衝動』を押さえていた。
それがもう、抑えが効かなくなつてきただ。

「そ……その……えつと……」

「え」

「い……いやああああ！」

バキッ！

そんな音が響いた。

「い……伊波……さん？」

「い……ごめんね！ 小鳥遊くん！」

小鳥遊くんは、床に倒れて、驚愕していた。

私は、予想以上に殴つてしまつたので、自分でも驚愕していた。

「その……さつきからずつと我慢……してたんだけど……つい……」

見ていた種島さんも、驚いていた。

でも、今の私はそんなこと、お構いなしだつた。

「ごねんね……でも……」

私は、彼を見据えて、しつかりと、はつきりと言つた。

「これからも、よろしくお願ひします」

私の心みたいに、いつの間にか。

雨はやんで、空は澄み切つていた。

そんな私は。

今日も小鳥遊くんのことを想いながら。
男嫌いを克服しようと思つ。

I | 品田 伊波まひるの想い（後書き）

とつあえず、『I | 品田 伊波まひるの想い』、完結です。

なんか、『WORKING!-!』なのに、どうも書き方が私寄りに
……。

ま、いつか。

今回の話で、やっとこれを書くのに慣れました。

次回も頑張りますので、読んでください。

神無月愛衣でした

四部II 山田のバイト生活（前書き）

今回の話題は山田です。

前回は「恋愛」で、少しシリアス（？）だったので、山田の力で明るめにしておつ。

みたいな感じです。

それでは、ビューティ

みなさんこんばんは。

ちっちゃくて可愛い、みんなの山田です。

みんなの山田がやつと語りです。

山田好きの皆さん、お待たせしました。

今回は、山田好きの人達に送る、山田の山田による山田のための小説です！

是非読んでくださいね！

それでは、スタートです！

ガツシャーン！

「ああ……。山田、またやつてしましました……」

あ～あ……。小鳥遊さん、怒るだらうな～。

前、山田がお店と自分のために、皿を割つたことを隠ぺいしようとしたのに……、それをあつさりと小鳥遊さんは見破りましたからね……。

さすが小鳥遊さんです。

相馬さんが方が、よつぱどかいですけど。

それより……。

「皿、どうしましょ～……。山田、今月はもう数え切れないと割つてしましました……」

あの表、書くの面倒なんですね～。

高いし、位置が。

でも、種島さんが身長を伸ばすためなので、仕方がありませんね。

ここは山田が大人にならなくては！

「なら最終手段です……」

隠ぺい。

「これしかありません。

「よし！ 山田の『山田巨割り隠ペイ作戦』、決行です！」

「…………おい、山田…………」

「な……何でしょ……」。

山田の背後から、もの凄い殺気を感じます。……。

「何を隠ペイするつて……？」

何回も怒られた山田は、もう誰か分かれます。

声だけで。いや、殺気だけで。

「た……小鳥遊さん…………」

「一体お前は何回目を割つたら気が済むんだーーー！」

「あ…………あああ！ や…………山田は悪くありませんっ！」

怖いです！ 恐怖の小鳥遊さんです！

鬼のよつな小鳥遊さんに、山田は一時間弱説教されました。人のことは言えませんが、小鳥遊さん、仕事をしましょ…………？

「うわ…………。酷いです。外道です…………」

最後に小鳥遊さんは、山田の頭をぐりぐりしました。痛いです…………。

死ぬかと思いました。

「こんな可哀相な山田を…………」

何でみんな放つて置くんですか——————？

こんな酷い目にあつた山田を…………！

放置するんですか！？

もはや山田を見てくれるのは…………。

甘やかしてくれるのは…………！

「相馬さんだけです！」

さあ、山田は向かいます。

山田の『優しいお兄さん候補』である、相馬さん 会こー。

「や……山田さん……？ そんなにぐつつかれると、おれが動きづら……んだけ……」

「大丈夫です。山田は相馬さんの邪魔はしませんから」「だつたら、邪魔になるから離れてて欲しいな……」

「ああ！ 最高です！ 相馬さんは！」

爽やかなお兄さん。

優しいお兄さん。

もう、相馬さん以外に、山田のお兄さんはいません！

天涯孤独の山田のお兄さんは相馬さんだけです！

「……大体、山田さんは天涯孤独じゃないでしょ……？」

「何を言つているんですか。山田は天涯孤独のみですよ」

「ははは……」

「冗談を言つてているんでしょうか？ いや、確かに山田は天涯孤独じゃないんですけど。

恐るべし、相馬さん。

山田の正体を知つていますもんね。

「とにかくです、相馬さん、こんな可愛い山田を甘やかしてくさい

「ええ……。おれなんかに？ 甘やかすんだつたら、小鳥遊くんの方がいいんじゃ……」

「あの鬼は山田を甘やかしてはくれません。甘やかしてくれるのは、相馬さんと音尾さんだけです」

「お……鬼つて……。確かにそつかもね、小鳥遊くんは……」

「おお！ 山田の意見に賛同してくれました！」

「嬉しいです！ わすが山田のお兄さんです！」

「そんな風に、相馬さんとじゃれていたら、

「あらあら。仲がいいわね～。一人とも、つて声が掛かりました。

「」の声の主は……。

「あ、八千代さん」

「轟さん、ナイス！」

相馬さん、何がナイスなんでしょう？
時々、言っている意味が分かりません。

もしかして、山田よりおかしい人なんでしょう？
かわい相馬さんだけに。

「でも葵ちゃん、今シフト中でしょ？ ちゃんと働かないで、相馬
くんが、甘やかしてくれなくなるわよ？」

「はっ！？ 何ですと…？」

「と……轟さん……」

山田の相馬さんが甘やかしてくれなくなる…
これは人生の一大事です！

「山田！ 精一杯働きます！」

「その調子その調子。頑張ってね、山田さん」

「そうね、相馬くん。でも、貴貴方も働いてね？ 佐藤くんだけに
任せてたら、可哀相でしょ？」

「大丈夫だよ。佐藤くんはできる人だもん」

「そ……そ……」

相馬さんは、山田と同じように、仕事をさぼっていたんですね。
山田のお兄さんなだけあります。兄妹ですもんね。

「いつからおれは山田さんと兄妹になったのかな……？」

「決まっています！ 出会った瞬間からです！」

断言できます！ 山田は胸を張つて、ちゃんとと言えますよ！

「断言された……」

「さあ… 無駄話はそこまでよ、葵ちゃん。これからは、仕事
「はーい……」

「今日は私も一緒にやつてあげるから」

「本ですか！？ 山田、八千代さんがいて心強いです…」

思わず山田は八千代さんにハグしました。

「あらあら。しょうがないわね～」

八千代さんは頬に手を当て、困った感じにしています。

「うわあ、行きました! 一升池だ

「アリ」

「さあ！ 今度こそ山田はやると決めた瞬間、
「八千代）。 パフエ）」

と、店長 白藤杏子の声が、八千代さんに掛かった。

「それを聞いた瞬間八千代さんは、

と、山田の傍を離れていきました。

「や……八千代さん……三田と一緒に仕事をするんじゃ……！？」

「あんね 葵ちゃん、相手ね、

「え……」

「でもね、葵ちゃん。一人でやることも、葵ちゃんが大人になるためには必要なことだから。それを成し遂げたらきっと相馬くんも、

二十九

「頑張つてね！」

「はい！ 山田、頑張ります！」

山田がそう言つたのを聞いて、安心したハ千代さんは、哲子を

「山田……！ 頑張ります！ 見ていてくださいね、相馬さん！」

山田の働きぶりを！」

「轟さん、正解に異論は盡こぐるめだな。」

「ううん、何も言つてないよ、頑張つてね

そう言つて相馬さんは、山田にひりひりと手を振つてくれました。
それば、山田にとって、凄く嬉しことでした。

「はーー！ それじゃあ、行つてきますー。」

さあ、山田は頑張りますよ！

今日で『今までの山田』は卒業です。

これからは『新しい山田』で行きます。

山田は今日から生まれ変わります！

さしつと、山田が頑張つて働いことを音尾さんが聞いたら、喜びますね。

そして、山田の『養子縁組』の願いも聞いてくれるかもしてくれません。

そのためにも……！

「山田、精一杯頑張りますっー！」

生まれ変わった山田、発進です！

……ちなみに、その後、山田はまた皿を割つて、小鳥遊さんに怒られました（今度は一時間です。一体どうやついたら、こんな長い時間怒れるんでしょう？）。

小鳥遊さんの所為で、山田の『やる気ゲージ』は、一気にダウンです。

気分は急降下 どんづらじやない程、落ち込みました……。

山田は、音尾さんが、養子縁組の書類を持って帰つてくるのを、動かずには、待とうと思います。

以上、山田の小説でした。

二品田 山田のバイト生活（後書き）

どうでしたか？『二品田 山田のバイト生活』は

少し明るめにしたつもりです。前回が暗かったので。

山田の語りは、正直面白かったです。『山田』と句回も連呼するの
は、少し大変で

したが。

次回は、八千代の語りで小説を書きたいです。

私は、八千代が一番好きなので、張り切って書きます！

では。また次回も見てくださいね。

神無月愛衣でした

四品目 ハ千代のチーフの仕事（前書き）

一 昨日から始めて、今日で四品目。早いな。

……と書いた上で、今回は、前回告知したように、語りはハ千代です。

杏子さん「〇〇年なハ千代」「〇〇年な私ですが、頑張って書きたい」と思っています。

それでは、スタート

四品目 八千代のチーフの仕事

ファミリーレストラン『ワグナリア』。
私、轟八千代は、このレストランで、ホールチーフをしているの。
理由は勿論、大好きな『あの人』の傍にいるため。
だから私は、今日も、チーフとして、仕事を頑張る……！

「八千代ー。パフェー」

いつものように、私の心に、『あの人』の声が響く。
私はいつものように、その声に返事をする。

「はーい！ 杏子さん！」

そして私は、キッチンへと向かう。

杏子さんに、私特製のパフェを作るためにー。

さあて、今日は何をトッピングしようかなー！

イチゴ？ メロン？ バナナ？ リンゴ？

あー！ 迷っちゃう！

でも、杏子さん、どんなパフェが食べたいかな……。

そんな感じで、私はパフェを作っていた。

決めた！ 今日はイチゴで！

うきうき（？）しながら、私はいつものように、クリームを絞つて、イチゴをトッピングして……。

この時間が、とても楽しくて、嬉しくて。

目の前の光景が煌めいていた。

そんな私に、

「おい、八千代ー

と、無愛想な声が掛かる。

一瞬、杏子さんのパフェを作る時間の邪魔をしないで欲しいな、とか思つたけど、振り返つて、私はその言葉を言つのは止めた。だつて、その人は……。

「あら、佐藤くんじやない。どうしたの？」

「『どうしたの？』じゃねーよ。いつも言つてただろ？ 店のものを勝手に使うなって」

「え？ どうして？ 杏子さんのためなんだから、こいじやない」

「……それじゃあ、店のものがなくなつちまうだろ？ そんなことになつたら、客がパフェを食べれねえじやねーか」

「そ……それは……」

どうしよう……。佐藤くんに反論を言われたから、反論できないわ……。

確かにどうかもしれないけど、でも、パフェを作らなかつたら、杏子さんが……。

「えつと……ね？ 佐藤くん……」

私が戸惑つていると、救いの声が聞こえた。

「……それなら心配はない」

「な……」

「き……杏子さん……」

「い……こつの間にこじこじ……？」

「どうこうことだ？ 店長」

「材料なら、今便利な後輩に買いに行かせた」

「え……？ 杏子さん、それって……」

「陽平だ」

「陽平さん？」

「だつたら安心だわ！」

「じゃあ、パフェ、作りますね！」

「ああ、頼んだ八千代」

「はい！」

さすが杏子さん、手回しが早いわ～！

さりにテンションが上がった私は、鼻歌を歌いながら、続きを作った。

「で……できた……！」

今日は、いつもより一段とよくできたわ！

早速杏子さんに届けなきゃ！

「杏子や～ん！ パフェできました～！」

「おい！ 八千代！ ……たっく……」

後ろで佐藤くんが私を呼び止めた気がしたけど、今は杏子さんを優先しなきゃ！

「お待たせしました～。杏子さん」

「おお！ 待っていたぞ！ 八千代！」

そう言つて杏子さんは、スプーンを手にとつて、早速食べ始めた。

「美味しい～。やっぱり八千代のパフェは最高だな」

そんな風に美味しいように私のパフェを食べてくれる杏子さんを見て、私は幸せな気分になつた。

「杏子さん、パフェ食べれてよかつただらうつな～」

「何で、私はぼーっとしていた。」

それにさつき、陽平さんが来て、（こつものよつと、ドアを壊していた。杏子さんはドアが直るまで、陽平さんを店には一切入れなかつた）材料を持ってきてくれたから、いつでもパフェが作れるわよかつたわ～！

今はお客様も少ないし、外の掃除をしようかな……。

そう思つて、外へ出よつとしたら、自動ドアの所に、女の子がいた。

「あら？ あれば、伊波ちゃん？」

どうしたのかしら？ 伊波ちゃん。

外をぼーっと眺めては、溜息をしているわ。

悩み事かしら？

「…………」

「……で、普通なり、悩みを聞いてあげるのよね。

先輩として。

「よし……！ チーフとして、『』は伊波ちゃんの相談に乗りますよ。」

決心した私は、伊波ちゃんの元へと向かつた。

「ねえ、伊波ちゃん。どうしたの？」

「あ……、ハ千代さん……」

「悩み事だつたら、私が相談に乗るわよ？」

「あ……、ありがとうございます……」

そう言つて頬を赤らめた伊波ちゃんは、とても可愛かつた。

私を頼つてくれる感じがして、嬉しい気持ちになつた。

「じつは、小鳥遊くんのこと……」

「？」

そう言えばこの一人、まえも喧嘩（？）したのよね。

あれは小鳥遊くんが悪かつたんだけど。

でも、伊波ちゃんはどこかへ行つちやつたりしたから、大変だつたのよね。

あのとき、見つけられてよかつたわ……。

つて！ 今はその話は置いておくのよ、私！

今は伊波ちゃんの悩み事を聞かなくちゃ！

「で、小鳥遊くんが、どうかしたの？」

「……私の『世話係』のこと……」

「…………？」

「小鳥遊くん、私の男性恐怖症を治すために、『世話係』をやつてくれてるけど……。最近、もしかしたら、見放されるんじゃないかな

つて……。心配で……」

「え……？ どうして？」

「だって、この前、『世話係』を止めおけばよかつた……、みた

いなことを言つていたから……」

「そう言えればそうだつたわね……」

「でもあれつて、小鳥遊くんの『冗談だつたんでしょう？』

だつたり……。

でも、伊波ちひさんの台詞は、まだ続きがあった。

「それ……」

「え？」

今までとは違つて、伊波ちひさんは声のトーンを落として言つた。

「殴られるの……いやなんだろ？ な……って思つてます……」

「あ……」

「た……小鳥遊くんは……氣にしてはなにかど……。私も時々思う

んです。殴られなかつたら、幸せなんだろ？ な……って……」

「それは

「だつてそうじやないですか？ みんな……殴られたくないでしょ

……？ だから……、小鳥遊くんもそうなのかなつて……一

「伊波ちひさん……」

気がついたら、伊波ちひさんは、ぽろぽろと涙を流していた。

伊波ちひさんの言つてゐることを止めし。

けど……、小鳥遊くんの気持ちば……。

……ひで言わなきや。小鳥遊くんのためにも。

伊波ちひさんのためにも。

「……それは……、違つてんじやないのかしら

「え……」

「だつて小鳥遊くんは言つてくれたんでしょう？ 伊波ちひさんには

あの日、『最後まで面倒を見ます』つて。

だつたら、そつと言つてくれた小鳥遊くんを信じなき。

確かに伊波ちひさんの言つてゐることを正しいわ。けどね、小鳥遊くんの気持ちば、わつじやないんじやない？

「あ……」

「小鳥遊くんは伊波ちひさんを信じてくれた。だつたら伊波ちひさんは、

そう言つてくれた小鳥遊くんを信じなきや。じゃないと……」

小鳥遊くんが救われないじゃなし。

私はそう言った。伊波ちゃんに、まつきりと。

「はい……。そうですね……。八千代さんの通りです……。私

……小鳥遊くんのこと、信じてなかつたかもしれません……」

「そう……」

「ありがとうござります、八千代さん。おかげで、心が晴れました

！ 私、今日も頑張ります！」

「それならよかつたわ……。お仕事、頑張つてね」

「はい！」

そう言って伊波ちゃんは、元気よく走つていつた。

「よかつた……。元気になつて」

心からそう思えた。

だから、杏子さんの声も、より心に響いた。

「そうだな、八千代」

「え……？ 杏子さん、いたんですねか……？ 全然気付かなかつた

です……」

「ああ、いた。伊波が元気がなさそうだったから、励まそうと思つてな……。でも、よかつたな」

「え？」

「伊波が元気になつて」

「…………！」

そう言つて杏子さんは、ぽん、と私の頭を撫でてくれた。

「きょ……ひー……わん……」

「八千代のおかげで、店の関係がギクシャクならず」に済んだ。伊波が元気になつた

そして、大人の声色で、杏子さんは言つた。

「さすが『ワグナリア』のチーフだな」

「…………つ！」

その言葉は、どんな言葉よりも。

一番嬉しいもので。

その言葉を杏子さんに言つて貰えて。

私の背景は、幸せに染まつた。

「八千代、これからもがんばれ」

私は嬉しさのあまり大きな声で、答えた。

「はい！ 杏子さん！」

私は気付かない間に大人になつていいく。

でもその、杏子さんと共に過ごした時間は、全て幸せ色で。

思い出になつて。

そして私は、今日もまた、杏子さんと一緒に、色とりどりの毎日を。

楽しい瞬間　思い出を、作つていいく。

四品目 八千代のチーフの仕事（後書き）

……随分と長い話になりましたね、『四品目 八千代のチーフの仕事』。

気合いを入れすぎました（笑）

実はこの話は、八千代のキャラソン『Colorful Days』を少し意識しているんで

す。気付いた人もいるのでは？

とにかく、楽しくなつていただけたら嬉しいです。

前にも言いましたが、私は今、『書いて欲しいストーリー』を募集しています。も

しあれば、メッセージを送つてください。

次回は誰を語りにするか決めてませんが、頑張ります。

それでは、また

四品目　まぶらりの漫遊　前編（漫書セ）

わつがい、五話となつました（それにしても早いな）。

今回ま、まぶらりが語つです。

ひつやへ可愛こまぶらりを表現できるよう頑張ります。

それでまぶらり

「こひつしゃいませ！」

私は大きな声で、元気よく言った。

「何名様ですか？……はい。では、こひつぐぢうぢ
お客様は、三名様（大人一人と子供一人。どうやら、家族みたい
です）で、その子供はとても可愛かった。

……小鳥遊くんが接客じゃなくてよかつた……。

「」注文はおきまりですか？」

「じゃあ、サラダと……」

お父さんらしき人が、淡々と注文する料理を言った。

「……」注文は以上でよろしいでしょつか？」

「はい」

「かしこまりました。では、こひつぐぢうぢ
私がテーブルを少し離れたとき、あの子供が「ねえ、ねえ……」
と、何かを母親に尋ねていた。

「あのお姉ちゃん、どうしてあんなに背が小さいの？」

「しつ！ 声が大きいでしょ！ 聞こえたらどうするの……」

「「めんなさこ……」

見ていなくても、女の子がしゅんとしたのが分かる。
それにしても……！

私は……！ 私は……！

「あ、先輩！ おはよひ！」ぞこます」

「おはよひ！ かたなしくん！」

気付けば、目の前には、同じフロア担当のかたなしくんがいた。

「あ～！ 先輩は今日もひつちやくて可愛いな～」

「……！」

か……かたなしくんも……！

みんな言つてるけど、私は……！

「ん？ 先輩、どうかしました……」

「私はちつちつやくなんかなによ————」

かたなしく人の台詞を遮り、私はそつまつた。

「もう！ みんなして私のことちひかりとかひかりやことが……！ 私はちつちやくなんかなによ————！」

「た……種島さん……？ どうしたの？」

「あ！ 伊波ちゃん！」

怒りながら食器を片づけていたら、伊波ちゃんが少し驚いた感じで声を掛けってきた。

そして鬱憤晴らしに、伊波ちゃん、「お客様の女の子のこととかたなしくんのことを話した。

それを聞いた、伊波ちゃんの感想は、「そつかー。それは災難だったね……」

だった。

「でしょ？ みんな私のことちひかりやこひかりやについて……。いつの身にもなつてみてって話だよ」

「確かに言えるね……」

伊波ちゃんは、私の意見に賛成してくれた。「私だってちひかりやこひかりやこと齒んでるのに……。これ以上傷を広げないで欲しいよ……」

と、俯きながら言つた、

「……全くです」

と、いきなり伊波ちゃんじやない声が聞こえた。

「うわっ！」

「みんなは種島さんのことちひかりとか可愛こととか言つてしますけど、山田山だつてちひかりやいんですみ——」

「何だ……葵ちやんか……。驚かれないでよ……」

「そうだよ、山田さん。私もびっくりしたよー」

私と伊波ちやんは、軽く葵ちやんを叱つておいた。

「すみません。山田はいづつ登場しかできなーんです。神出鬼没なんですよ」

「それはそれで困るけど、『登場』とか言わないで欲しいな……」

少し引いている伊波ちやん。

うん、さすがの私でも今の葵ちやんには引いたよ。

「で、どうしたの？ 葵ちやん」

「はー。実は山田だつてちやんちやんです。種島さんの次に

「もう言えばそうだつたね」

「でも、みんな種島さんを『可愛』、『かわいい』とか言つて……。山田のことなんて、これぱつちも見てくられません」

「葵ちやん……」

でも、確かに私の次に小ちやんは、可愛いのに、私みたいに、『かわいい』とか言われてない……。

「何でだらうね？ 葵ちやんもちやんくて可愛いの」

「でしょー!? 山田だつて可愛いんですねー！」

勢いよく言つ葵ちやん。

……本当にびっくりだよ。

「……それって……山田さんが、『小生意氣』だからじゃない？」

と、今まで沈黙を貫いていた伊波ちやんが、故口を開いて言つた。

「……小生意氣ですと……ー?」

伊波ちやんの発言に、ショックを受けている葵ちやん。

「うん……。種島さんと違つて、山田さんが『かわいい』とか言わねーのは、山田さんが小生意氣だからだと思つたの」

「つまり、山田が生意氣じゃなくなつたが、可愛がつて貰えるんですねー?」

「うん……多分だけど……」

ん？ 生意氣だと、かわいいとか言われない……？

「つて」とはやー・伊波ちゃん・葵ちゃん・

「？」

「？」

「私も、小生意氣になつたら、もつ『ちちちちこ』とか言われないつてことだよね！？」

「あ、確かにです。種島さんの言つ通りです」

「そうだね、種島さん」

やっぱりそうだよ！ 私も葵ちゃんみたいに、小生意氣になつたら、『妹オーラ』が消えて、ちちけやこことが、意味を『為さなくなるんだよ！』

「よしつ！ 葵ちゃん！」

「は……はい！」

いきなり話を振られてびっくりしたみたいだけど、
「私達で『可愛い・小生意氣つて言われ隊』、結成しよー。」
これを聞いた瞬間、明るくなつて、
「はー！ 山田、種島さんと結成です！」
と言つた。

「わ……私は……隊員にはならないけど、アシスタンントと言つか……。そんな感じでいいかな……？」

伊波ちゃんも、協力してくれるみたい。
だつたら、協力を頼まなきや。
頼れる人はどんどん頼ろう。

「いいよー・伊波ちゃん！ 伊波ちゃんもやろうよー。」

「うん！」

「よしつ！」

私、伊波ちゃん、葵ちゃんは、声を揃えて、宣言した。

「『可愛い・小生意氣つて言われ隊』！ けつせーい！」

もつこれで、『ちちちちこ』とか言わせないぞー！

五品田 ポカリの憂鬱 前編（後書き）

話を専えていたら、一話じゅく収まりない」と気付いて、慌てて前後編組にしまし

た。なので、あつと次回で、この『五品田 ポカリの憂鬱』は完結します。

ぽぽふりじゅを頑張って出していきたいです。

短いですが、次回もお楽しみに！

感想、お待ちしてます

六品田 まづりの漫遊 後編（前書き）

少々早いですが、後編の更新をします。

ぱぱらで前後編って、凄いですね。

史上初の、同一人物による連続語りです。

それでは、前回の続きをどうぞ

「……結成したのはいいですが、具体的に何をするんですか？」
葵ちゃんの質問に、思わず詰まってしまった。

「そうだね……。うーん……」

「まあ、種島さんと山田さんだと、目的……、田指すことが違うから……。同時進行で考えないと……いけないんじゃない？」

「そうだね……」

伊波ちゃんの言ひ通りだよ。

「私は『小生意氣』って、葵ちゃんは『ちつちやくて可愛い』って言われたいんだよね」

「はー。そうです。山田はちつ言われたいんです」

「うーん……どうしよう……」

「ちょっと困つたぞ？ 私達が田指す場所は、あるいみ正反対だもんな。

「あ……だつたらセ……」

と、恐る恐るとこつた感じで、伊波ちゃんがある提案をした。

「種島さんは、山田さんに『小生意氣』を。山田さんは種島さんに『ちつちやくて可愛い』って言われる理由を、聞けばいいんじやないかな？」

「……どうこいこと?」

「……どうこうことですか?」

一人できょとんと首を傾げて言ひた。

「えつとね……だから……。お互いがお互いから……その……学ぶ？ んだよ……。自分が知りたいことは、もう一人の相手が知つてるから……」

……

そつか！ その手があつたか！

「ナイス！ 伊波ちゃん！」

「ナイスです！ 伊波さん！」

私と葵ちゃんは、同時に言って、同時に伊波ちゃんに飛びついた。

一
わ
う
！

「さすがだよ！ その手があつたこと気付くなんて！」

「伊波さんのおかげで、私達は、目的を達成できそうです！」

「いいよ、全然、でも、お役に立てて、嬉しい」

ここで私達はお互いの目的を達成すべく隊を発足した

「あ、先輩！」

早速かたなしくんを発見だ！

あれから私は、葵ちゃんから『小生意気』について教わり、葵ちゃんに『ちつちやくて可愛い』について教えた。

これで、きっと私は『やがてやがて可憐な』（持てりやがて）やがてりやがて

い方) を言われずに済むぞ!

あー！ サイに先輩に可愛しかった癒され……

えい！ つて、かたなしくんから離れた。
うう、二つ言ひ放つ。

「私のこと、気軽に撫でないでくれる？」かたなしくん

一
え?
先輩?

うものを使わつた。

だから、今から、かたなしくんを相手に実践だ！

「私、今までかたなしきんから、『ちりぢやくて可愛い』って言わ

「先輩」

「今度から、」の種類ばかりで販売へ触らないでくれる?」

.....」

そういうと、かたなしくんは、俯いた。

……ちょっとと言い過ぎたかな？ でも、普段私に散々『ちつちゅい』って言つたお返しだよ！

『これで反省しなさい！』って思った。

でも、かたなしくんは、落ち込んだり、泣いたり（『）で泣いたら、男としてどうだる……』）した訳じゃなかった。むしろ……。

「お……」

「『お……』って何？ かたなしくん？」

かたなしくんは、拳を上に出して、大きな声で言つた。

「大人ぶつてゐる クールぶつてゐる先輩も可愛いーーー！」

……。

「えー————？」

今までのこと、意味ないじゃんか！ かたなしくん！

「…………もひ、私落ち込んだよ…………」

溜息をついて、涙目になりながら私は言つた。

「本當です……。山田も佐藤さんに、種島さんから教わつたことを実践したら、『うぜえ』って言つられて、頭ぐりぐりされましたー」

まだ痛いのか、葵ちゃんはこめかみを押さえながら言つた。

「三田は、どうせやつてもみなさんから『可愛い』なんて言われないんです……」

「私も、どうやつてもかたなしくんやみんなから『小生意氣』なんて言われないんだよ…………」

「げ……元氣を出して！ 一人とも…………」

こんな暗い私達を、伊波ちゃんは必死で励ましてくれた。

「一人とも、試した相手が悪かったんだよ…………。小鳥遊くんは、どう見ても、種島さんのこと可愛いって言つて、佐藤さんは、どう

やつとも山田さんのこと小生意氣つて言つかり。……」

「…………」

「だ……だから、他の人に試せばいいんだよ。相馬さんとか、八千代さんとか。……」

「…………そつか…………そつだよね。」

「…………そうです。山田は諦めません。」

私と葵ちゃんは、手を合わせて、宣言する。

「まだまだ諦めないよ。『可愛い・小生意氣つて言われ隊』は、永遠に不滅だよっ！」

「はい！ 山田、最後まで必ず種島さんと一緒にやつ遂げます！」

「一人とも…………元気になつてよかつた…………。」

やうだよ、まだ諦めるのは早い！

まだこの作戦が、失敗に終わつた訳じやないもんね！

よし！

種島ぽっぴり、まだまだ頑張るぞー！

「『可愛い・小生意氣つて言われ隊』！ 再び発足だー！」

やつとこつが、『ちつちゅー』って言われなくなるぞー！

いや、言わせなくしてやるー！

見てるー！ かたなしくん！

無事完結です。

ぱぱじは、樂しく語りをさせて頂きました。

これからも、頑張って欲しいですね^ ^

わあ、ここのからはずや出です！ 読んでくださいね！

次回から、長編になります。

アニメでは、伊波ちやんと小鳥遊くんの関係が主なので、この長編では、もう一組

の、八千代と佐藤の関係を中心として執筆していくります。

つまり、アニメとは正反対です。

なので、この長編を、お楽しみに！

そして、是非読んでください！

では、また次回、お会いしましょう

四部作 第二巻の序章（前書き）

長編の一話題です！

これは、アニメでもよくある光景を書いてただけですが。

でも、ここから長編は始まります。

では、スタート！

今から四年前。

おれは、一人の少女に出会った。

そいつはかなり変わっていて、常に帯刀していたり（後から知ったのだが、家が刃物店らしい）、店の店長が大好きで。

変人だけど、可愛くて。

おれは彼女に惚れた。

そしてそれから四年後。

今でも、おれはあいつ 轟八千代が好きである。

「全くやー。いい加減、佐藤くんも、轟さんに告白すればいいのに

ー」と、微笑みながら、相馬は言った。

「うぬせえ」

「そいやつて、引き延ばしたり、押しが弱いから店長に取られ……つて！ 佐藤くん！ 待つて！ それは痛いから！」

おれは、我慢が限界になつたので、その辺にあつたフライパンを適当に選んで、相馬に殴りかかる。

「もー。佐藤くんつたらー。怖い怖い」

「相馬、お前、それ心から言つてるのか？ 棒読みに聞こえるんだが」

「え？ 何言つてんの？ 佐藤くんは十分怖いじゃん？ おれが棒読みするわけないだろ？」

「こして相馬は言つ。

「むかつく……」

……相馬の『笑顔』って、何かむかつくんだよな。裏がありそつて言つうか。

まあ、実際ありそ^うだな。

「……相馬、お前は生きてるだけで邪魔だよ」

「え？ わ……佐藤くん？ 何？ おれ、何かした？」

「ああ……。お前は生きてたら駄目なんだ」

「……酷い言われよう……」

相馬は嘆息のまねをしながらこう言つた。

すると相馬は、「あ」と言つて、ある方向を指さした。

「轟さんだ」

振り返つてみてみると、そこには確かに八千代がいた。八千代はいつものように、店長のためにパフェを作つていた。また勝手に店のものを使いやがつて……。

つたく、しようがねえな……。

「おい、八千代」

「？」

振り返つた八千代は、おれに、「

「何？ どうしたの？」 佐藤くん

と、言つた。

……その手には、生クリームが握られていた。

「どんだけ作るんだよ。

「いつも言つてるだろ。店のものを勝手に使つなつて

「だからいつも言つてるじゃない。作らないと杏子さんが……」

「……店のものがなくなつたら、どうするんだ？ 今は客も少ねーからいいけどよ……。注文が入つて、材料がなかつたら、客が困るんだぞ」

「……うう……」

八千代が、冷や汗を流したのを、おれは見逃さなかつた。

このまま、分かってくれればいいんだが……。

そう思つた瞬間、忌々しい声が掛かつた。

「八千代ー。パフェ、まだかー？」

それに、八千代は、ぴくり、と反応する。

「はーい！ 杏子さん！ 今から持つてきまーすー！」

「おい！ 八千代……」

「じめんね佐藤くん。杏子さんが呼んでるから」

そう言つて、ピッチを上げてパフェを完成させた八千代は、スキップしながら店長の元へと行つた。

「ハア……」

「あははー。また轟さんに、捨てられちやつたねー」

にこにこと微笑みながら、後ろから相馬が言つた。

「でも、轟さんも健気だねー。いつも店長のために……つて！ ス

トップ！ 佐藤くん！ それはギブ！

おれが死ぬからー！」

……相馬で鬱憤晴らしでもするか……。

でも、さつきの、店長に反応した八千代……。

「…………っ！ そ……佐藤くん！？」

言葉にできないおれは、相馬で気を晴らした。

ここまでが、おれの日常。

このときのおれは、この日常が崩れるとほ。思つていなかつた。

八千代と、『あんなこと』になるつて、想像することができなかつた……。

長編の一話田を無事執筆できてよかったです。今からこの長編を続けていくのは、

少し大変だと思つますが、頑張つていきたいと思つります。

次回の語り部は、再び八千代でやつていきます。

オリジナルなので、原作とは違つし、自分にもどうなるか分かりませんが、どうか

見守つてください。

では、この辺で。

今日せ、あと一話ぐらい更新したいです

八品目 八千代と佐藤（前書き）

長編第一話です。

語りは、八千代です。

先に書いておきますが、この話は、今まで一番長いです。

それを把握した上で、お楽しみください……

「ああ……。またいりりしゃるわ……」

私は、あるお客様の姿を見て、溜息をついた。

「はい、梢さん。ビールです」

「ん~！ ありがとっ！ やっぱりここは最高だねっ！」

「はい。山田がいるから、ここは最高なんです」

「ぱふらうやんと葵けやんを占領しているお客様」

それは、ここで働く小鳥遊くんのお姉さん 小鳥遊梢さん。真つ昼間にも関わらず、梢さんはビールを飲んでいた。

そして、右側に葵けやん。左側にぱふらうやん。

この『ワグナリア』のウエイトレスを、一人も占領している。梢さんは、以前も一人を占領……と言つよつ、飼い慣らしていた。

これは、お客様が少ないつて言つても、迷惑だし……。

やつぱりここは、チーフとして、一言注意しなきや！

「よし！ 杏子さんのためにも頑張りましょー！」

勇気を出して私は、注意をしに言つた。

少なくとも、前みたいにはならないよつこしなきや……。

「あの……。お客様。前にも言つましたが……、うちのウエイトレスを占領されでは……」

「ん~？ あら？ この前の子じやん！ 元氣してた？ ねえ、前回は、好評だつたでしょ？」

「こきなり質問攻めにあつた。

「どうじめしょ……。答えるべきかしら？ 対応としては答えるべきだけ……。今は注意をするために来たんだし……。でも、

答えなかつたらクレームが……。でもこの方、クレームを言つそつにないけど……。

「八千代さん？ どうしたんですか？」

「……八千代さん？ 山田、何かしましたか？」

私を心配して、顔色を伺つてゐる一人。

「だ……大丈夫よ……葵ちゃん、ぽっぴりちゃん……つて！」

今更すぎるかもしないけど、一人の姿に私は驚いてしまつた。

「何で一人ともそんな格好をしてこるので！？」

まず葵ちゃん。

シンプルな白いワンピース。特に変わつたデザインではないけど、袖や裾が、ピンクのフリルであしらつてあつた。髪型も、いつものストレートではなく、ツインテールだつた。続いてぽっぴりちゃん。

なぜかぽっぴりちゃんは、メイド服を着ていた。こちらもいつものポニーテイルではなく、フリルがついたカチューシャを付けた、ストレートヘアだつた（髪が長い……）。

明らかにいつもの制服とは違つ。

「ああ、これ？ 私が貸したのよ。ほら、前にも言つたでしょ？ 制服が替わらないから、つまんないつて」

「はあ……」

でも、これははちょっと……。店にあつがぢつか……。

「言つたでしょ？ サービス業ない、工夫をしないとつて。こういうサービス心が大事なのよ」

「…………つ！」

な……嘘でしょ！？ 前にもいふなことあつたけど……、本当にそうなの！？

「ほらほら～。可愛い服なうつぱいあるから～！ 大丈夫、恥ずかしいのは最初だけよ～！」

「八千代さんも着よつ！ ねつ！」

「八千代さん、着て下さこ～！ 山田は八千代さんに似合つと確信しています！」

梢さんだけでなく、葵ちゃんやぽっぴりちゃんまで……！

「う…………つ！」

「ぜ……絶対、嫌よ！」

「ハア……。結局、着せられちゃったわ……」

前回の犬耳と青いドレス（？）ではなく、黒いドレス（いわゆるゴスロリ）。レース付きのカチューシャ。……今までで一番恥ずかしい……。

「……でも、折角だし、佐藤くんや杏子ちゃんに見て貰おうかしり……」

あら！ 噂をすれば、佐藤くんと相馬くんだわ！ 丁度良いわ、見て貰って、感想を頂きましょー！

「ねえ……佐藤くん、似合つかしく……」

「…………『じほつ！』

佐藤くんは私を見るた瞬間、咳き込んだ。

「え？ 大丈夫？ 佐藤くん？」

「ねえ、轟さん。その格好、どうしたの？」

佐藤くんの代わりに、相馬くんが尋ねてきた。

「これ……小鳥遊くんのお姉さんが……。『サービス業なら、工夫をしないと』って、言つてたからつい……」

「…………そうだったのか……」

と、復帰した佐藤くんが言つた。

「ねえ？ どう？ 似合つかしら？」

「何か言つてよ、佐藤くん」

「ねえ……」

「…………いつも『いひな』のよね……。佐藤くん、何も言つてくれない……。

黙つてばっかり……。

「…………やっぱり、似合わないのかしら？」

「な……っ！」

「だつて、佐藤くん、こつも何も話してくれなこじやない…」

「そ……それは……」

「それつて、似合わないつてことでしょー…? ……ちよ……ちよつ

とは……たまには、感想ぐらこ言ひても……」

「……お前だつて……」

と、佐藤くんは、何か呟いた。

「お前だつて、そうじやねーか

「何が?」

「暇さえあれば、いつも店長、店長つて……。店長の話ばつかじやねーか」

「そつ……それは! 杏子さんのこと、知つてほし、だけで……。「六時間も、いつも同じ内容で……。聞いてるだけの身にもなつてみるよ」

「う……。そ……それはだつて! 佐藤くんが杏子さんのこと、あんまりいいように思つてないから……。佐藤くんが、杏子さんのこと……つー」

「それでも店長の話ばつか聞いてたら、余計に……」

「……つ!」

あ……。佐藤くん今、絶対に杏子さんのことを……! 頭に血が上つていた私は、今一番言つたらいけないであろう言葉

言詞を言つてしまつた。

「佐藤くんなんて、大つ嫌い!」

「八千代!」

「轟さん!」

後ろで佐藤くんと相馬くんが何かを叫んでいる。

けど私は引き返そうなんて思つてない。

帰りたくない。一人になりたい……! 」

佐藤くわの..... 鹿

八品目 八千代と佐藤（後書き）

……どうでしたか？ 長かったでしょ？

この話は前から考えてて（梢さんのことも含めて）、書くのを樂しみにしていて、

いざ書いてみるとー

……長いじゃん……。一千文字始めて超えたよ……みたいな。

自分でびっくりです。

さあ、八千代と佐藤が主の話ですが、次回の語りは、佐藤 ではなく、相馬です。

この一人（喧嘩）を第三者から見たらどんな感じ？ みたいな。と言つか、二人を

仲直りさせる方法を、相馬さんに考えて貢こます。

ちょっと自分でも樂しみです……へへ

では、また次回

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7932y/>

WORKING!! -個性的なファミレス-

2011年11月26日20時02分発行